

序 章 尺牘資料と助数詞

第一節 はじめに

「尺牘」^{せきとく}とは、中国古代に一尺余の木札をもつて手紙を書いたところから、書状、書簡を意味する言葉となった。本章では、中国の元代以後、ことに明代、清代に行われた尺牘・尺牘集、及び、その案文集や解説書・用語集など、また、その影響を受けた我が国における出版物に見える「助数詞（量詞）」を検討する。

尺牘は、基本的には実用を旨とするものである。この点は公文書の場合も同じである。だが、文章表現をもつて個人が個人に訴えるものであるから、おのずから情感を込め、誠意を尽くそうとする。一方の公文書は、「様式（書式）」を用いてこの主観的部分を削除し、あるいは、形式化し、不可欠の要件のみを記す。両者間の大きな違いである。

この尺牘文体は、それ故、魏晋南北朝時代から唐宋時代を経る頃になると、文学的・芸術的にも成長し、内容・形式共に発展していった。^② 社会的評価を得た文章・音韻（韻律）・書法（運筆）、また、文房（紙・筆・墨・硯）などは、貴賤・緇素を問わず世人の関心の的となった。宋代から明代にかけては、多くの尺牘案文集や創作集、解説書や用語集などが出版され、尺牘の格式も成立・安定したとされる。これは、印刷文化の興隆期とも重なる。

尺牘は、今日でもそうであるが、基本的には書き言葉によって認められ、文字・語彙・語法・文体、また、運筆・墨色、料紙・封の用い方などの諸面において多くの約束事、即ち、広い意味の作法・法式がある。助数詞（量詞）は、その中の「数量表現法」に関わる語彙群であり、尺牘においては、物事の数え方は、重要事項の一つとなっている。

数え方に関する語彙は、今日、中国文法では「量詞」、あるいは、「陪判詞」「助名詞」「形体詞」「単位詞」など、日本文法では「助数詞」、あるいは、「類別詞」などと論じられている。しかし、日本語の助数詞は、数え方だけの問題ではなく、敬意表現、延いては税制における単位表現との関わりも認められるようである。

古代から現代までにおいて、尺牘に関する典籍は少なくない。時間・空間（地方）両面から中日双方における関係書全体を吟味し、助数詞研究上、必要十分な資料を選抜すべきであるが、古いところでは残存する点数は限られる。本章では、先ず左記の資料を検討しよう。刊行順に列挙すれば、次のようである。

- (イ) 『新編事文類要啓筭青銭』、元代著、著者不詳、泰定元年（一三二四）重刊。
- (ロ) 『翰墨双璧』、明王世貞著、万曆四一年（一六一三）刊。
- (ハ) 『翰墨全書』、明王宇編、陳瑞錫注。天啓六年（一六二六）成立。（寛永二〇年（一六四三）田原仁左衛門重刊本もある。）
- (ニ) 『尺牘双鱼』、明陳繼儒輯・原注、熊寅幾増補較正、明金閻葉啓元梓。（承応三年（一六五四）重刊本もある。）
- (ホ) 『翰墨琅璫』、明代末か、陳翊九編、寛文一一年（一六七二）今井五兵衛重刊。
- (ヘ) 『尺牘諺解』、著者（邦人）不詳、延宝八年（一六八〇）刊。
- (ト) 『玉堂尺牘彙書』、陳太士著、清康熙二十一年（一六八二）刊、貞享四年（一六八七）林五郎兵衛訓点重刊。
- (チ) 『尺牘集要』、明謝度君編、邵文聘刊、貞享元年（一六八四）文台屋治郎兵衛刊。
- (リ) 『尺牘筌』、木煥卿著、明和五年（一七六八）刊。
- (ヌ) 『書簡啓発』、高嶋清著、安永九年（一七八〇）刊。
- (ル) 『尺牘彙材』、戸崎允明監修、文化五年（二八〇八）刊。
- (ヲ) 『尺牘粹金』、藤田久道著、明治一一年（一八七八）刊。

右は、元代一点、明代五点、清代一点、日本の近世以下の五点（*印）である。これらにおける日本語助数詞に係する事象について検討するのであるが、就中、(イ)『新編事文類要啓筭青銭』（元代）は、明代以降の諸資料と大きく離れ、別本もないので、この一点だけはこの次節に取り上げる（ロ以下は、次の第一章において述べる）。

各資料の版本（原本）については、できるだけ所蔵元を訪ね、可能な限り実見すべく心掛けた。これは、明代前後の尺牘資料が日本にどのように受容され、その結果、彼土の助数詞が如何様に用いられたかという問題に関わってくるからである。かつて、古代中国から文書行政が導入され、日本律令国家樹立に与るところが大きかった。その文書行政と共に多くの助数詞（量詞）がもたらされ、日本語における数量表現も大きく展開することとなった（小著『木簡と正倉院文書における助数詞の研究』、二〇〇四年、風間書房）。然るに、この近世において、元々明代の尺牘資料が將來され、新たな、——というより、全く別語とも見受けられるような助数詞（量詞）群が導入されたのである。ここには、言葉そのものとは別の、その使用者層・使用場面などに関する問題も介在しているようだが、こうした問題も、また、助数詞研究の一端であろう。

注

(1) 波多野太郎「尺牘礼賛」、同氏編纂『中国文学語学資料集成』、『第三篇』、一九八九年四月、不二出版、二三〇頁。なお、呉承洛原著・程理濬修訂『中国度量衡史』（一九三七年初版、一九五七年重版、商務印書館出版）によれば、「一尺」は、秦代・前漢代に二七・六五cm、新莽・後漢代に二三・〇四cm、唐代に三二・一〇cm、宋代に三〇・七二cm、明代に三一・一〇cmであったとされる（五四頁より抄出）。

(2) 波多野太郎「尺牘の格式の歴史」、同氏編『中国語学資料叢刊』の『第三篇 尺牘篇』『第一卷』所収、一九八六年六月、不二出版、一頁。